

現代の多くの人にとって、無声映画は馴染みのないものであり、音声タイトルや誇張されたジェスチャー、音楽に置き換わることに慣れるのは困難であろう。発話がないことは、欠点として認識されている。しかし、無声映画は無声ではなかった。上映のレベル、つまり個々の映画館ではあるが、常に音楽や発話を伴っていたのである。ここでは、語り手、弁士、音楽家、オーケストラが、音のない映画に声を与えていたのである。

しかし、無声映画のこの無言は、ある重要なグループにとって大きな自由をもたらすものであった。俳優が母国語に関係なく起用されたからである。スウェーデンの女性がアメリカ映画に、アメリカ人がフランス映画に、フランス人がイタリア映画に活躍できたといった具合だ。多くの俳優や映画プロダクションが、この機会を利用した。初期の映画もまた、異国情緒を利用して、しばしば陳腐ではあるが他国や他文化の魅力的な描写を作り出した。

しかし、1910年の設立以来、ハリウッド映画の魅力は着実に増していたが、人種差別は1930年のヘイズ・コード以降に強くなり、特に肌の色が違う者同士の恋愛はタブーとなったため、アフリカ系やアジア系の俳優は、ハリウッド作品ではほとんど主役を与えられなかった。ほとんどの映画のプロットが恋愛物語で補完されていたのである。こうした人種差別が俳優の活動を制限することとなったので、早川雪洲やアンナ・メイ・ウォンなどは比較的に人種差別が少ないヨーロッパに渡って映画製作に参加した。

1930年頃から主流となったトーキー映画は、声が心地よくないと思われたり、女優の訛りや話し方が気になったりして、多くの女優と俳優のキャリアを破壊しましたが、今回はまた違うグループが製作者の視野に入ったのである。これは歌を歌える人間であった。

以上のような様々な理由で、ヨーロッパで活躍したアジア系の俳優は1920年代からいたが、その研究も行われてきたが、その活動を短期在外研究期間で調査を行ってきた。以下はこうした調査の一部である。

特に活躍が盛んであったのは、歌手から映画界に入った田中路子（1909-1988）がいる。田中は、1930年に家族によって強制的にウィーンに送られた。表向きは歌の腕を磨くためだったが、実際には既婚男性との交際の噂を絶つためだった。田中もまた、ウィーンで歌手として急速に頭角を現し、外交官から警鐘を鳴らされ、再び日本への強制帰国が迫っていた。田中は1931年、40歳年上のウィーンの大企業の後継者ユリウス・マインル2世と結婚し、これを免れた。この結婚は形式的なものであったが、マインルと田中は互いに友人として大切にしていた。この結婚で田中は経済的にも安定し、その自由を活かして歌手活動に励んだ。映画にも出演し、パリでマックス・オフェルスと撮影したこともあり、多くの足跡を残している。

田中の経歴は、数多くの新聞記事でたどることができる。田中は、自分に課せられた限界を克服するために、さまざまな方法で成功した女性であった。

1928年以降の女優アンナ・メイ・ウォン（1905-1961）のヨーロッパ滞在も、非常に注目される。ウォンは中国系のアメリカ人であったため、母国では差別を受け、両親の母国でも認知されることがなかった。

さらに、日本人歌手の湯浅初枝（1902-没年不詳）も、ドイツ映画や舞台で活躍していた。湯浅は1923年に早くもドイツに渡り、歌手としての修業を積んだ。彼女は高く評価されたが、エキゾチックな、つまり人種差別的なニュアンスを含んだものであった。ヨーロッパ人でない人間が、ヨーロッパの音楽を解釈することができるのだろうか？そしてもちろん、彼女はプッチーニの同名のオペラの蝶々夫人役を非常に多く任された。1930年代の初め、彼女はドイツの長編映画にいくつか出演したが、田中路子のような重要性を得ることはなかった。湯浅はむしろ歌手としてのキャリアに集中し、女優業はあまり真剣に取り組んでいなかった。彼女の痕跡は1943年以降消えており、第二次世界大戦が終わる前に亡くなったと考えるべきだろう。

別の日本人歌手もヨーロッパで女優として活躍していたが、上記の人物に関する資料はあまり見つけることができなかった。

以上の数人の女優の活躍に加えて、1900年から1930年にかけて、日本との関係があるヨーロッパ映画のリストをいくつか作成し、さらなる研究のための資料とすることを試みた。すべての作品が必ずしも日本生まれの俳優を起用したわけではないが、最初の兆候は現れている。初期の映画の魅力は活動写真ではあったが、初期映画が国境を越えて、例えばヨーロッパの風景を日本の観客に見せたり、逆に日本でできた作品をヨーロッパで見せたりすることができたので、新しい要素が加わったのである。もちろん、異国情緒は重要な手掛かりであり、日本は多くの理由から、ヨーロッパ以外の旅行先の中で最も興味深い場所のひとつであった。極めて異国的で、極めてエキゾチックでありながら、一方で洗練された文化を持つ西洋に非常に興味を持っているのです。

最初の10年間は、特にリュミエール兄弟の映画作品が実際に世界を旅していたが、その後の映画は、必ずしも現実とは一致しないが、物語の文脈では効果的な日本の再現や描写にとどまることが多かった。多くの作品が日本を映し出したが、それは必ずしも日本が望むような意味でのものではなかった。

そのために1926年以降、日本は共同制作によってコンテンツをより支配し、日本のイメージをよりよくコントロール、向上させようとした。ドイツとの最初の合作は、日本側で賀古残夢が監督した『武士道・鉄の掟』である。さらに、1928年には川喜多長政が東和商事を設立し、日本映画の輸出準備を行うことになった。

そこで製作された作品が少なくないが、リストアップする作業をし始めた。手間をとる作業なので未完成でこれから少しずつ補う予定である。

私の研究は、まず図書館の研究である。一般書籍や新聞・雑誌を扱う国立図書館のほかに、映画に関連した図書館、日本に関連した図書館を中心に調べた。ウィーンの多くの図書館のほか、パリのシネマテーク図書館、ヴェネチア・ビエンナーレ図書館、トリノの映画博物館の図書館などである。

現在、ヨーロッパの図書館は有料のところが多いので、通常は何度もコピーしたり、USB

スティックにコピーしたりして、自宅でこれらの資料を読み、まとめました。

また、近年、素晴らしい展示方法で注目されている映画博物館も、様々は訪問した。ロンドンの映画博物館も興味深かったが、ライブラリーは本数が小さく、あまり充実していなかった。この博物館の創設者とのインタビューでは、映画芸術の初期の発表場について興味深い洞察を得ることができた。一方、インスブルックのオットー・プレミンジャー・インスティテュートは、パンデミック時に閉鎖されたようで、滞在中、それ以上の情報は得られなかった。

さらに関連の展覧会、特にヴェネチア・ビエンナーレで 1930 年代を扱った展覧会を見ることはできた。そこで田中路子が描かれた出来事のひとつに立ち会ったという証拠は見つかったが、決定的な証拠はなかった。可能な限り、調査を改めたい。

全体として、私のヨーロッパでの研究滞在は、非常にポジティブなものであった。研究にはよくあることですが、探していたものは見つからなかったりして、代わりに他の研究への参考資料が得られたりしたこともある。さらに、今回の調査で知り合った方々と共同研究の可能性も探りたい。

短い滞在でしたが、ゆっくり研究することができ、興味深い資料を探し出すことができました。

どうもありがとうございました。